アナザー

アシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アナザー

【Ｎコード】
Ｎ０５５８Ｚ

【作者名】
アシア

【あらすじ】
たぶん気持ち悪い小説です。

僕は恋に落ちた。
彼女と僕は本を貸し借りする。それだけの関係。でも、僕が恋するにはそれで十分だった。
僕の趣味は読書だ。クラスメートがグラウンドにサッカーやら野球やらをしに行く中、僕は一人本を読む。休み時間にみんながおしゃべりを楽しんでいるのを横目に本を読む。自分でない自分に自分を重ね、いろんな人になる。自分に出来ないことがこの世界ではできる、それが楽しくて、僕の日常で、僕のすべてだった。体を動かすことが好きな、程度の低い連中を相手になんてしてられないから話しかけられないのは好都合だった。だったのに、あの日、僕の読書を邪魔するやつが現れた。それが彼女だ。
「ねえ、それなんて本？」
この一言がきっかけで、僕たちの本の貸し借りが始まって、同時に僕の恋も始まった。
どうやってこの気持ちを伝えよう？　どうやったら彼女に近づけるだろう？　それだけを考える日々。本に集中することができなくなった。本を読むふりをして彼女たちの会話に聞き耳をたてる。彼女の好きなタレント、彼女の好きな食べ物、彼女の住んでる場所、彼女の好きな異性！　そんな情報をそれによって手に入れることに成功した。好きな人は僕じゃなかったけれど、彼女の好きな人なんて、僕の好意の前には些末な問題に過ぎない。
「ありがとう」
彼女に本を貸す際に言ってもらえる一言を一言一句聞き漏らさないよう、瞳を凝らし真っ赤なルージュのひかれた唇を見る。きれいな声、こんなに美しい音を奏でるものをなぜ国宝にしないのだろうか……。
ある夜、彼女に対する思いが止まらなくて、僕は本に自分をなす

りつけた。もう一人の僕のついた表紙を彼女が触れる、そのことに興奮した。その興奮を糧にさらに自分をなすりつける。
そんな本にですら彼女はお礼の言葉を言ってくれるのだ。
僕に触れた手で、彼女は髪をすき、唇を触る。
その光景を思い出して、次に貸す本に……。僕はもう止まれなかった。
彼女に好意を伝えるなら文章しかないと思った。本好きな僕らにとってはこれがベストな方法に思えた。口頭で伝えようとしたって、きっと緊張して頭が真っ白になってしまうだろう。
どんなことを書こうか、ただそれだけを考えて三日三晩考えとおした。学校に行くことも、本を読むことも、寝ることも忘れて。ただ、食事だけはとらなければ死んでしまうので一日三食は守り通した。
『蝉の鳴き声も聞こえなくなり、肌寒さを感じる季節になりま……』
没。
『アイラービュー』没。
何度もの失敗を繰り返し、結局気持ちを伝えるための言葉はこれ以外に存在しないと気づいた。
『好き愛してる』
この手紙を緊張しながら、彼女の下駄箱にいれた。

その日の放課後、僕の手紙は黒板に張り付けられていた。
「で、どうなの？　本の貸し借りなんかしちゃってあいつのことどう思ってるの？」
彼女の友達が下卑た笑いを張り付けながら彼女に聞いた。
「どう思ってるもなにも、図書館みたいなものだよ」
声が遠く聞こえ、目の前が白くなっていくのを感じる。

「ただ、今は」
続きは聞いてはいけないような気がした。
「キモチワルイ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0558z/

アナザー

2011年12月2日00時46分発行